

事はおもしろくないと思ひます。幼稚園で、自然と幼児の人物を發展するやうな保育をしさへすれば、自らそれが小學校の準備にもなるわけなのであります。

今一つ注意しなければならぬ事は幼児の個性であります。感情の強い子供をあまり訓戒したり叱つたりするのはよろしくありませんまた秩序正しい動作を無理に要したりする事は自然を破る事にはなりませんかと思ひます、感情の強い子供にはな

「エミール」の幼児教育感懐(二)

二 女王の務

春の光が暖かに園生を照らす時に萌え出づる草花の芽を損はじと守るは園守の務である。人の世の春を集めて家庭の園に萌え出づる若草の幼な子

るべくこちらから融和するやうに、また叱るなどいふ事は滅多にしないやうにして、その性質の變化を待つがよさうです。各自の個性をよく見て強過ぎるやうなのは次第にやはらげて中性を得しむるやうに自然に導くやうにしたいものです。一方に於ては子供の相互間の關係、一方に於ては個々の特性を適當に指導してゆくといいふ事でありたいもので御坐います。

文。學。士 福 島 政 雄

を守りはぐむは母の務である。あゝ母親といふ一言ほど吾々の心に無限の神韻を響きたせる言葉があるであらうか。

「婦人が其の子供に對する務に就いて疑ふことが出来るであらうか。」母親の雙の乳房から滴る甘

露の最初の一しづくこそは母の子に對する第一の務を物語るものではあるまいか。ルーソーは教へて言ふ「損はれたる母親の乳房に滴る雫よりも健康なる乳母の乳を吞ませよ」と。嗚呼その損はれたる母の乳房よ。それには無限の悲しみのこもれることもあらう。量り知られぬ痛みのももれることもあらう。其の痛みを其の悲しみを愛らしの幼な子に傳へじと取かくす柔かき乳房の胸の奥には如何に優しき母の愛が秘められるであらうか。秘められし憂の胸に添ふをかきいだく母の心にこそ女王の務つくし得ぬ堪へがたき思の波は湧き立つであらう。げに母こそはホームの花園の女王である。女王の誇をもて健かに女王の務つくし得る母の樂しみ、あゝ世に何物かこれにたとふるものがあるであらうか。

親しみの泉を母の胸に汲む幼な子の小さき唇はたゞ肉體を養ふ甘露を母から受けるばかりではないのである。幼な子は母親の眞實のはぐゝみを其

の胸より外に得ないであらうか。「乳ばかりならば他の婦人でも或は獸でも母の代りになることが出来やう。さりながら母親の注意深き心に代る心が此の世の中に存するであらうか」とは吾々に與へられたる永遠の疑問ではなからうか。思へば乳母の問題も常に悲しき疑問を吾々に與ふるのである人の子の母に代りて胸の乳房を捧ぐる身も悲しいかな幼な子の身はわれより分たれたる身ならず、幼な子は乳母の乳房に母親の愛の心を汲む前に幾度又幾度悲しき失望を其の小さき胸に繰り返すべき運命とはなるのであるのを木石ならぬ乳母の身は如何に悲しく感ずるであらうか。

併し其の悲しき垣は除かれて幼な子は日毎毎に乳母になつて來ることゝもなるであらう。こゝに乳母がその嬉しき眉を開く時、曇れる日はいつしか母の顔に宿つて自己の運命の悲しさに涙ぐむことはないであらうか。あゝ誰が爲に生み出したる我が子なればわれにはなつかずして乳母の胸

に限りなき愛らしの笑を洩さうとはするのであるか。われにも母としての自然の愛は胸に湧けるものを、此の涸れ果てたる我が胸の泉の怨めしさよと口にくそ出さね、他所の婦人に我が子の愛を奪はたるやうな嫉ましの情が迷へる凡夫として母の胸に湧き立たないであらうか。子供の心から言つても我が母ならぬあだし人の乳房に養はれて幾年の春秋を過したことを成長の後に振りかつて考へる時には乳房に對する暖かい懐しさに伴つてまた一方では我が母の乳房にはぐぐまれぬ不自然の悲しみの情が湧かないであらうか。彼を思ひこれと思へば女王の最初の務のつくされぬホームには永遠に二つの悲歎の波がながれてさらぬだに物思ひ多き人の世の旅になほ一入の愁思を加へるものとなるのである。

或は乳房を賤しき者と思はせて子供が母親に對する愛のきづなをつないで置かうと務める人もある。そして乳房の必要がなくなるや否や情けも暖

か味もなく子供を引き離さうとつとめる。かくして年又年送りむかふる月日のうちに子供心には乳母の顔もさだかに覚えぬやうになるのを待つのである。あゝさりながら子供の心に印象せられたなつかしい面影を斯様に悲しい道によつて薄らがせ母親の嚴しさを以てこれに代へやうとおもふのは何といふまちがつた考であらうか。斯様にして損はれた子供を優しい心の子供にすることがどうして出来やうか子供はこれによつて冷たい背恩の人となるばかりである。子供に甘露の乳を與へその生命をつくり成した乳母を斯様に侮蔑することを教へるのは即ち背恩を教へるのではないか。

ルーソーの述べる所如何に人生の春の初に於る悲しき事實に觸れて居るであらう。かよい人間の子の胸に優しい心の宿るには母の乳房にはぐぐまれてこそこれを期することが出来るのであるのに、生れて幾日又は幾年、身ははや生みの母を離れて他人の乳に養はれ、子供はこゝに其の親愛の

情を母親と乳母との何れに傾くべきかを分きかねて居ると、悲しい人の心は淺ましくも子供の爲に嫉妬して、假令そは無意識の間に行はるゝことであるにもせよ、母親と乳母と互に子供の心を奪ひあふ。何といふ人生の悲しさであらう。しかもその基く所を尋ねればホームの女王たる母親がその女王なるの誇を以て生みの子供に對する最初の嬉しき務をつくし得ないことにあるのである。

吾人は此に人生の爲に泣くと同時に其の源の惡を匡すめ一路に進まずには居られないではないか。

あゝ女王の務、その最初の小さき務すら既に罪なき幼き子を背恩の岐路に立たしめやうとするではないか。此の如く思ひ去り思ひ來ればいと小さき母の務のその實は如何に大きいものであるかを吾人はしみじみと感せずには居られないのである。

ルーンーは更に進んで述べる。

此の事に關しては更に續けて説いても宜しい。希くは余の説く所を徒らに無用の思想をならべ立

て、眞理の力を失はしめるものと爲さないことを祈るばかりである。此の密接な關係は普通に人が考へて居るよりも遙かに大である。何人も其の最初の最も神聖なる務を思ふ者は直に母の務を思ふに相違ないのである。此の最初の務を怠ることからしてすべての不健全なことは起つて來るものである。すべて人倫の上の秩序もこれよりして亂れて來るのである。かくしてすべての人の心に自然といふことが無くなつて、家庭の内は生命のない空虚な場所となり、子供は家庭の人々をひきつける力がなくなり、他の人々はその家を尊重することもなくなるのである。従つて人は子供に注意し、なくなると共に母親をも顧みないやうになり、家庭の親しい生活は弛んでしまひ、血を以てつながれたきづなも習慣によつて強められることもなく遂に家庭には父もなければ母もなく子供もなければ兄弟姉妹もないといふやうな荒涼たる有様になつてしまふのである。お互に理解し合ふこともな

くなつてしまふ以上はまして互に愛するといふことはなほ更に無くなるのである。各人はたい自分といふことばかりを考へるやうになるのである。

此の如くにして家庭が荒涼たる沙漠となつてしまつたならば人は其の家庭に求めて得ざるものを何處にむかつて求めるやうになるであらうか。

嗚呼かゝる想像は何といふ悲惨なものであらうか。しかしながらこれは單にルーソーの豊かなる空想の産物に過ぎないであらうか。吾人は靜かに今の世を考ふる時に胸中いつしか悲感の交々なるを禁じ得ないのである。あゝ今の世の我が國には如何ばかり家庭の女王の務が等閑に附せられてあるであらうか。父は父らしくもなく母は母らしくもなく、兄弟姉妹の心ははなれ々々になつて永遠に淋しき道を辿つて居る「家庭の人」が今の世の我が國には如何に多いことであらう。此の如きところには家庭は既に無いのである。誠に母なき家庭に眞の家庭があり得るであらうか。母のいつく

しみのない家庭は永遠に死滅せる死火山の如き家庭ではあるまいか。千秋の氷がこれをとぎして永劫の冬はそれに宿るのではあるまいか。しかもこれはすべて女王の務が無視せられるために起つたことであることをおもへば今の世の母たる人こそは此のルーソーの教語によつて限りなき覺醒を受くべきものではあるまいか。あゝ世の母とよばるゝ人々よ、御身等はホームを外にし家を外にして御身等の刹那の樂虚榮の影を追つて居ても、人に永久の青春なく家庭そのものにこそ永遠の春は宿るべきことを思ひかへしたならば自ら悚然として前途を悲しみ、勇ましく立ちかへつて眞の家庭の建設にいそしむ覺悟は起らぬのであらうか。

ルーソーは此に言を新にして進んで説く。

併しながら母親がその子供を自分で哺育するこゝとが出来るときには此の世の中の道徳は自然によくなつて来るものである。而してすべての人々の胸に自然の感情は湧き出で、來るものである。國家

はこれによつて其の人口を増して繁榮に赴き、此の結果としてすべては一つになるのである。一つに融和するのである。家庭生活の刺激は道德の頹廢を止むる最上の醫藥である。子供が樂しげに騒ぎまはる事も、心なき人には仕事のさまたげと思はれるであらうが、親心ある人には樂しい琴の調べともきかれやう。子供の聲こそは父親と母親との心を互に此上なきものと思はせて互に相愛せしめる爲の調和の樂の音ではあるまいか。げに子供の聲こそは夫婦のゑにしの糸を愈々密に愈々かくむすびつける絆である。子供一人の心が家族の人々の衷心から生々とした愛情を結びつくれば、家庭内の世話は女にとつては最も好む仕事となり男にとつては樂しい慰みとなるものである。斯様にして一の障碍が除かるればすべての事は都合よくなつて自然はやがてそのすべての力を以て此處に入り込んで來るのである。實に婦人が再び母にかへりさへすれば男子は直に父にかへり夫にかへ

るのである。

あゝ何といふ尊い言の葉であらうか。此の如くなれば婦人は眞の母たる道にかへることによつて一家を化しひいては一郷を化することも出來るではないか。誰か婦人の仕事母の仕事をつまらぬこといふものゝあらうぞ。婦人の心がその幼な子の上に注がるれば社會は善にあらたまり國運の隆盛にむかひ、婦人の心があらぬ方にそゝがるれば世は濁り國は衰へる。婦人の心によつて消長する此の人類の運命を思ふ時誰か滿腔の熱血を婦人の正しき覺醒のために捧げぬ者があらうか。正しき覺醒とは母としての覺醒である。ホームの女王としての務の自覺である。これを思ひ翻つて今日の世の有様を觀すれば如何に歎かはしきことが滿ちて居るであらうか。婦人は違々として外物を追ひ敢へて己れの心に世を化すべき泉の汲むべきあるを求めず、新しき世の學校の教師としての神聖の職を手握つても其の職務の上にそゝぐべき己が

心の温かい情はかへりみずして嫉妬の爲に軋轢し面白からぬ風を校の内外に吹かせて居るではないか。あゝ天下の女教師たる諸姉よ。諸姉は兎にも角にも我が國の子供の精神を導くべき知識と徳とを胸に納めて居る身ではないか。何故にその知識と徳とを温かき生命あらしむる一路には覺醒せずしてたい己れの計にのみ浮身をやつすのであるかあゝ諸姉何故に母たる自覺にかへつて女王たるの務に進み以て天下の婦人を導く儀表とはならないのであるか。思一度此に至つて我が國の婦人の前途に案ずる時余にはたい悲しき涙があるばかりである。ルーソーは當時自己の爲に泣き世の爲めに歎いた。余も亦今の世に自己の爲に泣き世の爲に歎かざるを得ない。あゝ天下の婦人よ、何故に諸姉は清き涙を此の世にそゝいで家庭の園の泉によつて我が社會を洗ひ浄めゆく源とはならぬのであるか。余が熱涙をおさへつゝルーソーの言葉を紹介するのは徒らにこれを祖述せんがためではなくて

今日の世に對する刺激を此に求めむが爲めである。

ルーソーは更に進んで其の至情の教を宣る。

併しながら其の心の清き若き婦人はなほ今の世にも此處かしこに見出される。斯かる婦人はその汚れぬ心の動くまゝに世の人のかしましき流行の沙汰や騒ぎの聲に對しても雄々しくこれに反抗して徳にみつる優しく、自然が婦人に定めたる美しき務をつくすのである。かゝる母の務を忠實につくす婦人こそはその夫から正しき永遠の愛を受けらるものである。その息子や娘から眞に子供らしい優しさを受け得るものである。かくして世の人に認められ尊まれて健康の間に善き子を産み、行く末かけて幸福の道歩み、やがてはその娘達からも世の人の親達からも儀表と仰がれるのである。

母無くして子供は有り得ない。母と子との間には互につくすべき務がある。一方から其の務をつくすことがおろそかであれば他の方からもその務

を等閑にするものである。子供はその母を愛せねばならぬ。まだ子供がその事を知らぬ前に、まだ本務などいふむづかしい姿でそれが子供にせまつて來ない前に子供は自然に母を愛せねばならぬ。しかも母が子供の心を満足せしめ眞實の心から子供を養育して血縁の親しみを強めないならば愛の心は既に子供の幼時に消え去つてしまつて、子供の心情は云はゞまず生れもせぬ前に死んでしまふのである。

母の務が永遠に子供によつて果されることをかくまでも親切に述べたルーソーの言葉の中には實に美しく婦人の務女王のつとめに關する不滅の教が含まれて居るではあるまいか。あゝ不滅の教、これこそはすべての女子の辿るべき道を教へたものではあるまいか。婦人は母たることによつて眞の感化を世に及ぼすことが出来るのである。母となるといふことは單に子を産むといふことではない。單に養育するといふことでもない。美しき心

の泉を子供にそゝぎ、子供を通じてこれを浴ぐ世にそゝぐことである。あゝ今の世の婦人達よ。徒らに世に時めく名を賣る人よりも名も知られぬ片田舎の山里の婦人の優しき心がいかばかり美しき働を此の世には及ぼして居るであらうか。爲すべき務を爲したるを世にはほこる心は未だ至れる心ではない。爲すべきつとめをつくしてしかも「咲きて誇らず散りて恨みざる」心の人こそは眞の道にかなへる人である。あゝ眞の道婦人としての眞の道たる母の務、悠々として自然の間に此の務をつくす人、吾人はこれをよんで理想の婦人といひたい。幼な子の生ひ立ちゆく家庭の花園は此の婦人の爲の神聖の仕事場である。それは名もなき陋巷の片隅にあるかもしれぬ。しかもそれは温かにかゝやく精神の王國であり子供の爲の樂園であつて春の光はこゝに照らし春の雨はこゝにそゝいで子供はその間にいつしか大きくなり、世を動かす力をもその静かなる一日々々の日ぐらしの上に得ら

るのである。その春の光をあたへその春の雨をそ
ぐ人こそは母親である。家庭の王國の女王であ

る。あゝその美しい心の姿よ、吾人はそこに永遠
の幸福と力との宿らむことを祈るばかりである。

幼稚園の卒業式

學習院教授 野口 幽 香

幼稚園の卒業證書は學習院の方では始めの中は
しなかつたのですが、近頃する事に致しました。

さてして見ますと、大變にその結果がよいと云ふ
事がわかつて參りました。幼稚園といふものが子
供の記憶から消えないといふよい結果を見る事が
出来ました。大きくなつてから此の記念の證書を
出して見て幼稚園を思ひ出す、たつた一ひらの紙
ですが、幼稚園と子供の生涯をつなぐ大變に價値
のあるものになるのです。

其後貧民幼稚園の方でも思ひついて、證書をや
る事に致しました。貧民の方ではもつと大切な事
でありました。何年間此の幼稚園で保育を受けた

といふ事が子供の一生に取つて非常な喜びであり
かつ其證書は將來職業を求むる上に於てもよほど
の便宜を得る事になるのです。證書の文句は學
習院の方は別に面白いものでもありませんが、貧
民の方は左の通り認めて居ります。

「右は二葉幼稚園に於て保育を受けたる事を證す
神を信じます／＼善良ならん事を祈る」

幼稚園としてはもちつと子供らしいよい詞がほ
しいのですが、今一寸考へつきませんから、教へ
て下さる人があるまでこのまゝにしておくつもり
です。それから裏に園歌を記して、設立者二人の
名を書きます。